〔特別展によせて１〕

俵屋宗達と料紙装飾

江戸時代の初期は、茶道、華道、書道、能楽などの諸芸能が普及し、文化活動の享受層が飛躍的に広がった時代です。また、王朝文化への関心が高まり、公家を中心に源氏物語などの王朝文学が学ばれ、古人の優れた筆跡を鑑賞する、古筆鑑賞会が盛んに開かれました。このような状況の下に、書に用いる料紙の装飾にも、新たな展開が見られます。

船橋秀賢の日記『慶長日件録』は、当時の古筆鑑賞会を窺う上で、非常に貴重な資料を提供してくれます。この日記を読みますと、慶長十年（1605）前後に古筆鑑賞会が盛んに行なわれていることが分かります。「真筆間違いなきものなり」という秀賢の感想が添えられる場合もありますので、古筆鑑定の場でもあったようです。

これらの記事には、古筆の筆者や書写された内容は記載されていますが、残念なことに、料紙の記述がありませんので、当時の人々がどのように装飾された料紙を見、どう考えていたかを具体的に知ることはできません。

一方、ほぼ十年ほど年代の遡る資料ですが、『山上宗二記』に料紙装飾に関する興味深い記載が見出せます。その名物ノ水指並水翻の項に「紹鷗定家色紙、今井宗久に在り　下絵に月を書く也　安部仲丸が天の原の歌也　宗及色紙、下絵葎也　八重葎の歌也　右定家の色紙、下絵在がよし、下絵無きは悪し」とあります。ここでは、堺流茶道の祖であった武野紹鷗が所持していた藤原定家の色紙が、今井宗久と津田宗及に渡り、それぞれ月と葎の下絵があることを記し、しかも、定家の色紙を識別するには、下絵の有無が基準になると記されています。この記述ですと、文様風の下絵ではなく、図様を大きくとりあげたものでしょう。このような色紙が和歌にふさわしいと考えられていたことが分かります。

俵屋宗達はこの時期に金泥と銀泥をもちいて、色紙や短冊に下絵を描いていますが、それらはこの『山上宗二記』の記載を思わせる画風を示しています。また、宗達下絵の料紙のほとんどには、光悦流の書で、和歌が書写されていることを考え合わせますと、宗達の料紙装飾も、和歌を初めとする仮名文字の王朝文学にふさわしい料紙として制作されたものでしょう。

宗達が金銀泥で料紙装飾を描いていた時期に、料紙装飾には、他に二つの注目すべき動向が見られます。すなわち、平安朝以来久しく途絶えていた唐紙の料紙が復興し、木版金銀泥刷による料紙装飾が新たに生まれました。

唐紙とは、元来その名の示す通り中国から舶載された料紙の総称ですが、この場合は具引き（白色顔料である貝殻の粉末を塗ること）された紙に、木版に雲母をのせて文様を刷り出した料紙を指します。木版金銀泥刷とは、ちょうど唐紙の顔料を雲母から金泥、銀泥に置き換えた技法です。この二種類の料紙装飾には、同じ版木が使用される場合もあり、非常に密接な関係にあります。

慶長八年（1603）に、イエズス会によって、長崎で刊行された『日葡辞書』では、唐紙について「ダマスク織りのような色や文様のついた紙」と説明しています。同書の唐綾の項にも、ダマスク織りのようなものという記載がありますので、ここでの文様とは、染織作品に見られるような連続模様を指していることが分かります。

しかし、『日葡辞書』の刊行とほぼ同時期に制作された唐紙には、確かに連続模様風の意匠もありますが、絵画的な趣を示すものも多く見られます。興味深いことに、それらの中には、先ほど述べました宗達の金銀泥絵と非常に近い作品が見出せます。

たとえば、萬野美術館所蔵の「四季花鳥図下絵新古今集和歌巻」に使用されている鹿の刷り出された唐紙と、宗達作品では、「平家納経」の願文の鹿図、また、山種美術館所蔵の「鹿下絵百人一首和歌巻断簡」の巻頭の鹿が挙げられます。

唐紙の版木の原図を宗達が描いたかどうかは、未だ検討すべき問題を残しますが、少なくとも、これらが同じ文化的な背景の下に生まれた料紙装飾で、互いに密接な関係にあったと言えます。

これまでは宗達の料紙装飾が生み出された文化的背景について考えてきましたが、今度は絵師宗達の立場から料紙装飾を考える必要があります。絵師としての仕事の中心は、やはり本格的な絵画制作にあります。おそらく、宗達も金銀泥で料紙装飾を描いた以前に、水墨画や着彩画を手掛けており、相当の評価を得ていたものと考えられます。

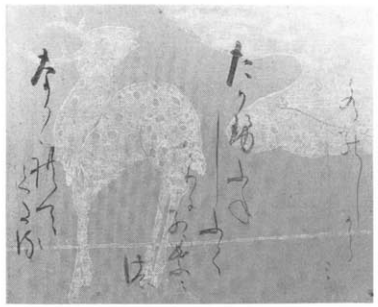
宗達の金銀泥絵を見ていますと、描かれる対象が非常に大きく捉えられていることに気づきます。草花が描かれる場合、この傾向は殊に顕著です。モチーフの大きさから見ますと、屏風や襖などの大きな画面に描かれた草花図とかわりがありません。

この当時制作された草花図の屏風や襖は現在あまり残されていませんが、絵の中に描きこまれた画中画資料がこの少ない資料を補ってくれます。その一つに豊国神社に所蔵される「豊国神社祭礼図」があります。画中には桟敷を設けてこの祭礼を見物する貴顕の様子が描かれており、その後方には美しい屏風が置かれています。その中に、蔦の描かれた金屏風がありますが、これを見ますと、宗達の金銀泥絵の蔦の描写とよく似ています。

宗達の料紙装飾は、前代までにはない革新的な様式を示すものですが、また、宗達が京の絵屋という環境の下で自らの芸術を育ててきたことも忘れてはなりません。王朝料紙の復興という時代の流れが、室町時代以来の伝統を持つ町絵師の宗達に活躍の場を与えたと言えます。

（中部義隆）

四季花鳥図下絵新古今集和歌巻（部分）



平家納経願文（見返絵）

豊国神社祭礼図（部分）

季刊 美のたより №92
平成２年９月６日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.